

天戸祐輝

表紙イラスト／秋月からす

退魔術札士

# 風音

フォーリンググメイデン

試し読み版



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『退魔術札士 凧音 フォーリングメイデン』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



退魔術札士 凧音

フォーリングメイデン

天戸祐輝

表紙 / 秋月からす

## 登場人物紹介

Characters

---

みしばなきね

### 御柴風音

邪羅を退治する一族【御柴】に生まれ、将来を有望視されている少女。  
男と肉体を重ねて得た精気を両手に填めた赤いグローブに貯め、邪羅を滅ぼす聖氣に変換する。

### ジュダ

圧倒的な力を持つ邪羅。

「こんなに早い時間に邪羅が現れるなんて……」

日の当たらない校舎裏。

年に数回しか人が来ないその場所で、両手に赤いファイティンググローブを着け、スレンダーな肢体に学園指定の制服をまとった少女が一人、細い骸体にコウモリの腕と羽をつけた、三体の子供大の魔物と対峙していた。

「自分たちの世界に還りなさい、ここは貴方たちがいる世界ではないわ」

澄んだ清水のように穢れのない声を奏で、全ての物を斬り裂く妖刀のように鈍く光らせた黒瞳で威圧する少女。

青いアンダーシャツに白の半袖ブラウス、赤紫のミニプリーツスカートという制服をまとった彼女は、学園でも有名な御柴凧音という少女だ。

彼女は常に学年トップの成績を維持しており、誰に対しても優しいその性格が、男女とわず憧れを抱かせている。

何よりも凧音という少女が人を惹きつけている理由は、類まれなその容姿だ。

柔らかさを残しながらシャープな顎へと描かれる小貌の輪郭は、天上の女神を思わせる絶妙なラインで描かれ、切れ長な猫瞳や、綺麗な稜線を描いて鼻頭へと流れる鼻筋は、完璧な計算をほどこされたかのようにその小貌に備えつけられている。

特に桜の花びらを思わせる唇は、天界に咲く華を思わせるほど美麗な形を有し、誰もが

邪な思惑を抱いてしまうほど美しい。

肢体はスレンダーながらも出るところは出ており。特に胸やお尻は同年代の少女と比べても大きく、制服の胸部やスカート地を大きく膨らませている。

四肢は長く、スカートから伸びる両脚はムチムチと肌が張り、太くも細くもない絶妙なラインで足首へと流れ、紺のニーソックスに彩られて艶めかしい雰囲気すらかもし出していた。

風音は、誰もがうらやむほどの美貌と肢体を有した少女なのである。

「メス……犯ス……孕マセル……ゲヒヤヒヤヒヤヒヤ——ッ！」

コウモリ羽の魔物は眼の前にいる美少女の姿に欲望をたぎらせ、次々と羽を大きくはばたかせて彼女の肉体に襲いかかってきた。

「たった三体の低条で私を倒そうとするなんて……」

軽く瞳を閉じ、ブラウスのポケットから数枚の術札を取り出す。

御柴とは、邪羅とよばれる魔物を退治する一族である。彼らは邪羅を低条・中条・上条と魔物の能力に合わせて分類し、陰ながら人々を護っている。

風音に襲いかかってきた邪羅は、その中でも一番能力の低い魔物だった。

退魔術札士たいまじゆしとして魔を祓っている少女は、自分に襲い来るコウモリ羽の魔物に向かって術札を構え、突き刺すような眼光で睨みつけた。

「この淨炎で生まれ変わりなさい、穢れし者よ！」

叫んだが刹那。彼女は三枚の術札に邪を祓う聖氣を乗せ、魔物に向かって投げ放った。術札は空中で青白い炎をまとい、吸い込まれるように邪羅の骸体に突き刺さっていく。

「ギユギユウウウウウウウウウッ！」

同時にひびき渡る醜い悲鳴。

三体の邪羅は空中上で青白い炎に包まれ、美しい肢体に触れる事なく黒霧へと変わりはじめた。

「私は負けるわけにはいかないの……」

人外とはいえ命を奪った悲しみに退魔少女は瞳を潤ませ、地面に落ち消滅していく邪羅につぶやいた。

※

「もうほとんど精氣が残ってないわ……」

日がかたむき、オレンジ色に染まりはじめた教室内で、風音は両手の赤いグローブをじつと見つめていた。

彼女たち御柴の者は、自分たちの持っている道具に精氣を貯め、聖氣と変換して邪羅と戦う力にしている。

精氣とはその名の通り、身体を重ね相手からもらう物である。風音は肉交で得た精氣を



が絶頂寸前にされていた肉体はお尻とはいえ異物を挿入された快楽に喜び、早くも腸が触手に慣れはじめているのだ。

絡まりながらお尻の中を律動する陵辱肉は、一回り太い切っ先で蛇腹状の内壁をゴリゴリと削り、奥壁を力強く突き上げては直腸まで抜けていく。少女はその度に桃尻の中に弱電流を流されたような痺れと、異物が抜けていく喪失感に濡れた声であえぎ、身を振った。本来貫かれる部分である秘孔は後ろからの刺激に膣を蠕動させ、薄く拡がりはじめた淫唇はショーツにこすれ、切なさの混じったくすぐったさで淫部を疼かせてくる。

「もう尻孔を犯される快楽に慣れたのか、この雌めが！ ならこっちも可愛がつてやる」  
 ジュダは手近な机に美少女の身体を仰向けにして倒し、左胸に喰いこませていた手をスカートの中にもぐりこませてきた。

美峰乳には赤い手形がくつきりとつけられ。ヒリヒリとした甘美な痛みに包まれていく。  
 「うあ……もうやめ……おかしく……」

（こんな……身体中が疼いて……もう耐えられなく……）

絶頂寸前で生殺しにされていた風音は、立て続けの陵辱に意識がもうろうとしていた。上半身に這っていた幻蟲は、触手が尻孔を貫いたとたん両手に向かうのをやめ、その場で肌をむさぼるように嬲っている。退魔師とはいえ、肉交の快楽を知っている彼女の肉体はこらえられる限界に達しているのだ。

「大人しいではないか、早く俺のモノでマ○コを貫かれ、歡喜にあえぎ乱れたいのではないか？」

「い……いや……だれがお前なんか……んああつ！」

氣丈にも首を振り、魔の悦樂を拒み続ける美少女。彼女の頭から流れる長い栗色の髪は頭の動きに合わせてサラサラと揺れ動き、床についた毛先が踊るように靡く。

だが肢体の方は違った。机上で仰向けになつた彼女の身体は、前合わせを開かされて白濁に汚れたブラウスを淫らに揺らし、解放された右胸を呼吸に合わせて大きく揺らし邪羅の眼を樂しませてしまう。

淫部に向かつて来る手に捲られていく赤紫のスカートは徐々に艶めかしいニーストッキングに包まれた両脚を露わにし、青いハイレグショーツに包まれた股間部を夜の準備室に晒していく。

(欲しい……お尻じゃなくて……アソコに……硬く熱いモノが……)

絶頂寸前にされた肉体。そして尻孔を貫き、腸内を陵辱する触手が彼女の理性を崩しはじめた。スカートを捲り淫部に近づく手に抵抗をせず、逆に閉じていた両太腿の力を緩めて腰を浮かせ、触りやすいように淫部を魔の指先に差し出してしまふ。

「ククク……、ずいぶんと欲情しているじゃないか、自ら尻をあげるとは」

「そんな事ないわ……んふっ……私が邪羅に発情なんて……」

ジュダの言葉に反論し、赤くなつた美貌を背ける。しかし、いくら言葉で反論したところで彼女の肢体は限界まで発情し、尻孔でピストンし奥壁を突き上げてくる触手に肉悦を感じている事は否定できない。

退魔少女は淫部に近づいてくる邪な手に鼓動を高鳴らせ、心ならずもヒクヒクと秘孔を蠢かせてしまう。

「今すぐ、この淫らなマ○コを黝つてやろう」

「くあん……ひやふううんんんんんっ！」

ジュダの手が抵抗を失つた両脚を左右に拡げ、愛液で濡れ青色を濃くしたクロツチに触れてきた。生暖かな蜜に濡れたそこは雄の指が触れたとたん、ジュワツと女蜜が溢れて濡れ布の面積を拡げ、ヒクヒクと蠢く女孔の形を浮き上がらせた。

「さすが俺のつがいになる雌だ。準備はもうできているようだな」

「誰がお前の……んう……つがいになんて……ひあっ!？」

肉体は穢されても心だけは屈しないと声を荒らげる。だが邪羅の指が濡れた股布を横にずらし秘孔に触れた瞬間、絶頂寸前だった肉体が敏感に反応してしまった。

ムツとした女温から剥き出された淫部は、冷たい空気に撫でられてゾクゾクとした疼きを背筋にはしらせ、秘孔に触れた太い邪指に背德的な焦燥感を感じてしまう。

「あっ……そんな太い指……やめ……くあうううっ！」

ジュプッ……ジュプジュプジュプ……。

「んあっ!? 太い……太ひいいいいいいいい——つつっ!」

プシュッ! プシュウウウウウウウ……

人間のペニス並みに太い指が秘孔を押し拵げ膣内に埋まった瞬間。美しき退魔師は机上でブリッジするように肢体を仰げ反らせ、長髪を振り乱して絶頂に駆け昇ってしまった。

太い指を突きこまれた秘孔からは、水風船が破裂したような勢いで白みがかつた愛液が噴き出し、閉じた瞳から自然と涙が溢れていく。

上半身を蝕んでいた幻覚の蟲たちは、彼女の絶頂に合わせて一斉に両手のグローブへと駆け巡り、人の耐えられる限界ともいえるムズ痒い悦流で頭の中を直撃してきた。

風音は初めて味わう人外の快楽に。ピクピクと肢体を痙攣させ、邪から解放されていた右胸を大きく揺らした。

「んあああ……あふっ! これが邪の……快楽なの……くうんんん……」

初めて感じる魔の快楽に、彼女は身体中の全てを痙攣させていた。肌の上には未だ電流が駆け巡っているかのような痺れを感じ、絶頂に達した頭が理性を飛ばしたまま回復しようとはしない。

大量の精氣を流れこませた両手のグローブは白い発光をはじめ、精氣が貯められた事を告げている。

「指を挿れただけで達するとは、ずいぶんと肢体を持って余しているようだな」

ジュポッ！ ニュプヂュポッ……。

「はうっ！ んあ……ああ……」

美しい獲物の絶頂に満足した邪羅は秘孔から指を、そして尻孔から二本の触手を引き抜き彼女の肢体から離れた。

身体の全てを解放された風音は、全身を冷たい空気に撫でられながら天井を濡れた瞳に映し、荒い呼吸を繰り返しながら放心していた。

赤い手形をつけられた二つの肉果実は大きく揺れ、プックリと膨れた真円の乳輪の中心でトキ色の頂がフルフルと震え。クロッチをずらされ晒された淫唇はパックリと拡がり、淫らに濡れ光るサーモンピンクの粘膜を蠢かせ、女孔からピュクピュクと愛液を噴き出している。

ショーツの中では、触手に何度もピストンされた尻孔が閉じる事を忘れて蠢き、治りかけの傷口のような痛みと痒みで尻全体を包んでいた。

「どうだ御柴の女。俺のつがいになればもつと魔の快樂を与えてやるぞ」

ジュダがまだ射精を行っていない巨魔根を黒い瞳に映し、両肩の触手をくねらせながら訊いてきた。

風音はすぐに答える事ができない。邪を滅ぼすものなら答えは簡単である。しかし、魔

拳のような巨大な亀頭で秘孔を貫かれ、退魔少女は身が裂かれるような痛みで悲鳴をあげた。自分の腕ほどある太幹で膣内を埋め尽くされていく拡張感に全身は突っ張り、細頸を天井に向けた美貌は苦痛に歪んでいく。黒い瞳は丸くなるほど見開き、悲鳴に開いた桜唇からはピンクの舌を突き出し、唾液をコポコポと溢れさせてしまう。

「これが人間の雌のマ〇コか。狭くて褻が絡みつき、魔物の雌とは比べ物にならない名器だぞ！」

苦痛に悲鳴する美少女の腰を両手で掴み、無理やりごく狭な膣に巨大な魔根を突き挿れていくジユダ。少女の腹部は内側から膨らまされるように雄槍の形が浮き出し、その切っ先が形のいいお臍にまで届こうとしていた。

「ぐはッ！ あぐううう……裂け……お腹がもうイッパイに……」

膣が引き裂かれるほどの拡張感を感じながら、風音は人間相手では得られない女の充実感に笑みをこぼしていた。

巨大な雄槍で満たされた膣は今にも裂けそうなほど痛く、息もできないほど苦しい。だが同時に自分の全てを満たしてくれる人外のペニスに喜びを感じ、亀頭が子宮口を突き上げてきた感覚に頭の中が真っ白に染まっていく。

膣内を完全に埋め尽くした肉幹に、自分の膣褻が淫らにも絡みついていく感触がハッキリとわかり。人のモノとは違う灼けた鉄のような雄槍の灼熱感は、内部から肢体を灼くよ

うに拡がり、肉体が邪羅の雌へと作り変えられていく事に被虐的な喜びすら感じてしまう。  
 (スゴイ……こんな奥まで……これが上条の邪羅のモノ……)

少女は自分の膣内を満たした邪肉槍に喜び、自ら腰を左右に振り肉悦を求めだした。秘孔の外にはまだ三分の一ほどの肉幹が残り、火傷するような熱で女芽や淫唇を灼いてくる。「ククク……、もう腰を振りはじめるとは。そんなに俺のモノがいいのか？」

「ンあッ……んん……いいわ……膣が裂けるほどイッパイになって……はくッ、太いのが奥にまで届いてるううううううッ！」

ジュブ……ジュブ……ズチャ……ジュポ……。

痛みを感じつつも肉悦を感じ、秘孔を限界まで拡げて身を振り腰をくねらす退魔少女。その淫らな姿に、ジュダは己の欲望を抑えきれなくなっていた。

少女が離れないように強く両腰を掴んで押さえ、ゆっくりと腰を前後させ若く美しい肢体を自分の物に変えていく。

「んああああッ！ スゴ……オマ○コがこすれて……はひッ、お腹の中が掻き出され……はふッ、ひやくうんんんんんッ！」

肉体を内部から灼くような灼熱の肉槍が膣をピストンし、その鉄のように硬い巨幹で幾枚もの襞をこすり捲っていく。その度に美しい退魔師は膣全体に弱電流を流されたような痺れに嬌声をあげた。

肉幹に浮き上がった幾多の瘤と拡がったエラが膺襲と触れあい、幾つもの膺粒のついた表面を削る度に全身が痙攣したように震え、手足の先までピクピクと動いてしまう。

風音は自分の肉体が魔に墮ちていく墮落感を感じながら人外との肉交にあえぎ、邪羅の腰つきに合わせて腰を動かし、Eカップの峰乳を大きく揺らしてつがいになる邪羅に見せつけた。

「いいぞ風音！ お前はもう俺の物だつ、もつとあえぎ、快楽におぼれる淫らな姿でこの俺を興奮させる！」

人間を憎み、魔に降った美少女の淫姿にジュダは腰の動きを速め、膺を引き裂くような勢いで子宮口を突き上げてきた。刃りにはジュプツジュプツと淫らな水音がひびき渡り、退魔少女の桜唇からは途切れる事なく歓喜の淫声が奏でられる。

「はうツ、うツ、んツ、あはあアアッ！ 激し……くあッ！ もつと強く……はふッ……もつと強くオマ○コを突き上げて！」

風音は全身に感じる痺れに乱れながら、ダラリと下げていた両腕をジュダの首に絡め上半身を起きあがらせた。両脚はより深く邪羅の肉槍を啜えこもうと穢れ者の太い腰に巻きつけ、自ら駅弁の体位となつて人外の快楽に身をゆだねはじめた。

「いいわ……イイッ！ これに比べたら今まで私を犯した男のモノなんてクズだわ、あんンッ！ もつと気持ちよくさせて……もつと私を邪に染め抜いて！」

肢体を上下させ、激しい動きで邪の快楽を求める。彼女はジュダの眼の前で大きな肉果実を上下に揺らし、ピンツと尖った乳首を邪な口に押し当てて快楽をむさぼった。淫らに歪んだ秘孔は肉幹がピストンする度に捲れ返り、愛液と共に膣壁まで掻き出し淫らな挿入音を奏でている。

退魔少女は自分の膣が壊れるような感覚に妖しい笑みを浮かべ、自虐の喜びに全身の性感を高めていた。

「グウウウ！ いい締めつけだ……。周りを見ろよ、弱い邪羅どもがお前の痴態を見て興奮し、うらやましそうに涎を垂らしてやがるぜ」

「ひゃふッ、あうッ……んん……きやうんんんッ！」

つがいの言葉を聞き、自分の周りを黒い瞳に映してみる。

そこには低条と中条の邪羅たちが股間のモノをはち切れるほどに勃起させ、上条の邪羅に貫かれてあえいでいる自分を見て興奮していた。

風音は自分の肢体に突き刺さる淫視に背筋を痺れさせ、より淫らな部分を見せようと肉交の動きに合わせてヒラヒラと揺れるスカートを捲り、大きな美尻と太い邪巨根を啜える秘孔を披露する。

「はあんッ……んはは……もつと見てえ……ふはッ！ 私のオマ○コが大きなチンポ啜えてるの見て……はあうッ！ 淫らな私を見てもつと辱しめて……」

甘えた声で自分を見る邪羅たちに肉交を見せつけ、突き刺さってくる視辱に淫靡な笑みで魅了する美少女。今の彼女にはもう退魔師としての姿は欠片もなく、邪羅を統べる女王といつても過言ではない淫蕩さをもし出していた。

「クク……見られる事に快楽を覚えたのか。ならこっちの孔でもう一度触手を啜え、奴らの興奮を高めさせてやれ！」

「くうあんんっ……いいわ突き刺して、私の全てをジユダの物にして！」  
ニユプッ！ ズニユプヂュボニユプニユプウウウウウウッ！

「キャウアウウウウッ！ 入ってくる……また気持ちいいのが力強く、刺して……奥まで突き刺してえええええええッ！」

邪羅たちに見られながら二本の触手で再び尻孔を貫かれた彼女は貌を仰け反らせ、駅弁状態のままジユダに抱きつき歓喜の嬌声を奏であげた。

薄壁を通して膣の巨大肉槍と触れあう二本の触手は、絡まりながらS状器官の奥壁を突き上げ、下半身を破壊してしまふような勢いのピストンで尻辱をしてくる。

三本の陵辱器官に二孔を陵辱された彼女の肢体は、何万ボルトもの電流を流されたかのような悦流に襲われ、全身の肌が狂おしいほどのムズ痒い痺れに包まれていた。

「ああッ、ンッ、きやううッ！ 身体が壊れ……はンッ！ 気持ちいいよお……」

もう少女は肉悦以外の事を考えられなくなっていた。膣から流れてくる魔の悦流は彼女

の全身を性感帯に変え、頭の中に淫欲の霧を充満させ理性を奪い去っていく。

膣は自ら意思を持ったように幾重もの襞で巨魔根を舐めあげ、大きく波打ちながら巨幹をきつく締めつけている。

「気持ちいいのか風音？　なら俺以外の奴にもつとサービスしてやれよ、そらっ！」

「んあッ、きやううううウウウウウウッ！」

快楽に身を焦がした風音の肢体をジュダは強引に反転させ、今度は立ちバックの体位で後ろから膣と腸内を突き上げてきた。

突き刺されたまま反転させられた所為で、膣と腸はネジリ裂かれるような痛みと狂おしい痒みに襲われてしまい、彼女の意思に拘らず濡れた悲鳴が部屋中に木霊し、肢体がブルブルと痙攣してしまう。

「お前がイッたら俺もこの膣と尻の中にタップリと射精してやるぜ、そらっ!!」

後ろから女体を責める体位に上条は興奮し、彼女の肉体を壊すような勢いで肢体を貫き、秘孔と尻孔を捲り返して二孔の最奥を突き上げてきた。

人外の陵辱器官をピストンされる二孔からは立て続けに濡れた音が奏でられ、陵辱幹が出入りする度に少女の体液がしぶいていく。

桜唇からは淫欲に濡れたあえぎが部屋中に木霊し続け、否応なくジュダや周りにいる邪羅たちを興奮させた。





を凄まじいスピードでピストンさせはじめた。

少女の腹部に浮き出していた亀頭の陰影は、凄まじい勢いで縦長の美麗なお臍から秘孔近くまでを往復し、膣内部を引き裂くような摩擦力で肉体を責め立ててくる。

尻孔を陵辱する触手も同じ勢いで腸内を嬲り犯し、二孔から与えられる強烈なムズ痒い痺れが、激痛と絶頂の相反する感覚にさいなまれる風音の肉体を襲ってきた。

「んあッ！ あびッ！ すご……気持ちひいよ……あうッ！ もと犯ひれ……オマ○コ壊れてもいひから……くあんッ……奥まれ突き刺してエえええエえエエッ！」

退魔少女は仰け反ったまま肢体を戻す事もできず、今まで感じた事のない激痛と絶頂が混ざった人外の快楽に甲高い悲鳴をあげた。全身からは大量の汗が噴き出し、白濁に穢れた肌を洗い流しながら大きく揺れる肉果実の頂から飛び散っていく。

魔の物に変えられつつある肉体は、人では受け入れられない巨肉槍と触手を滑らかに律動させ、膣内で何度も快楽の電流をはしらせ少女を更なる絶頂へと押し上げていく。

「んあああああッ！ 出して……早く貴方の熱い精液でオマ○コ満たひて……あうッ！ あッ、あッ、あッ、はあふうううウウウウウッ！」

肉悦に乱れる少女は狂乱したように大きな桃尻を上下に動かし、自ら峰乳を揉みしだき激しく悶えはじめた。彼女の腸内では二本の触手が内部に白濁を登らせながら暴れ、膣内の巨大魔根がビクビクと脈動を繰り返し、子宮内に入りこんだ拳亀頭を膨らましていく。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**